
奇譚

raki & 竜司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇譚

【Nコード】

N3334T

【作者名】

raki & 竜司

【あらすじ】

この世には科学や常識では理解出来ない不思議な出来事や事件、物語が沢山存在する。

霊、物の怪、魑魅魍魎、そんな存在が齎す身近な恐怖。

そんな奇譚は誰の身にも起こりうる現実なのだ。

掌編集あるいは短編集として連載します。単体読めますが、各話に繋がりが予想できることもあるかもしれません。殆どが掌編になるかと思えます。

更新速度はバラつきます。

フィクション、ノンフィクション問わず、執筆しますので、蒐集に時間がかかるかもしれません。

他の連載の息抜きに始めようと思います。

*この小説はブログや他小説サイトにも掲載しています

第壱話 水音

その日はひどく蒸し暑い夜だった。

まだ夏も始まっていないのに、じっとしていると自然と汗が滲むような、そんな暑さだった。

大学進学に合わせて東京に引っ越した僕の住むハイツにはいつも水の流れる音が聞こえる。ハイツの前に川が流れているのだ。

そんな川の音を聞いていると、シャワーでも浴びて汗を流したいと感じ始めた。僕は思い立つとすぐにシャワー室に入り五分ほど熱いシャワーを浴びた。

シャワー室から出た僕は体をタオルで吹きながら、真っ直ぐ冷蔵庫庫の前に向かい、その扉を開いた。冷気が漂うのを肌を感じながら、スポーツドリンクのペットボトルを掴み、そのまま半分程の量を飲み干した。

そして気づいたのだ。背後に何者かの気配を感じるのを。

水の音が聞こえた。いつもとは違う水の音。川の水流の音ではなく。まるで何かから滴り落ちるような水の音。

ひたひたとフローリングに落ちる音が聞こえる。

ゆっくりと振り返った。特に恐怖心はなかったと思う。

僕は水溜りと長い黒髪をそこに見た。三十センチ程の直径の水溜りに纏まった長い黒髪。さっきまで確かにそこには何かが存在していた。そう思わざるをえない光景だった。

部屋にはいつも通りの川の音が微かに漏れ聞こえる。

梅雨を前にしたある夜の出来事だった。

第貳話 水死

俄雨が止み、湿気った空気が辺りに立ちこめていた。夕陽が眩く輝き、木々の葉に付いた水滴と川の水流をきらきらと輝かせている。壮年の男、本島忠晴は川辺を歩きながら幼少の頃を思い返していた。もとじまたたはる

この川は本島が小学生の頃から少しばかり変わっていた。

昔は大雨が降ると、どこからともなく木片やらゴミやらが流れ着き、それらが積もって一週間ほど同じ場所に留まっていた。川の流れは穏やかになり板のような木片が飛び石のように川に並ぶ。反対側の岸まで並ぶと宛然橋さながらのようで、子供たちがそこを飛び跳ねて遊びだすようになる。

湿った木片の橋を片足ずつ踏み込んで跳ねていく。本島は、子供の時分、友達と共にこの自然の橋を渡って遊んでいた。ただこちら側と向こう岸とを渡るだけのことであるが、その当時は何故だかそれが楽しいことのように思えた。

近所に一人、友達の輪に入れないトモちゃんという子供がいた。その子は足に軽い障害があつて、歩くことはできても、走ることができなかった。だから、輪に入ることはできず、いつも本島や本島の友達が川で遊ぶのを遠くで眺めていた。

ある日、三日ほど大雨が降り、川にいつものように流木が溜まりだしていた。

本島は友だちを連れて、それから二、三日流木を跳ねて渡る遊びをした。それもいつもと同じことだった。そして、トモちゃんがそれを遠くから眺めていたのもいつも通りだった。

この遊びにはルールがあつた。流木や木片は四日目にはすっかり片付けられてしまうのが普通だが、もしそれ以上の期間それらが片されない場合は、この遊びはしないというものだ。

これは、単に危険だったからだ。子供でもその辺りは弁え^{わきま}ていた。流木や木片は水を多分に含んでおり、四日も経ちと腐って脆くなるのだ。だからどちらにせよ遊びには使えなくなる。

余程の大雨だったのか、その時は四日以上が経ってもそれらは片付けられなかった。川のそこら中でゴミが溜まっ^たいて、片付けに時間がかかっていたのだろう。

大雨が止んで五日後のことだった。

トモミちゃんが亡くなった。

死因は水死だった。

幼い頃の僕らは、川の近くで遊んでいて溺れたのだろうと伝えられた。そして、それを何も考えずに受け入れた。別段仲が良かったわけでもなければ、虐めていたわけでもなかった。だから悲しみも特になかったのだろう。

しかし、今になって、そんな昔の事故が頻繁に思い出される。こ^うやって川辺を歩いていると、本島の脳裏に彼女の姿が浮かぶのだ。友達の輪に入れなかったトモミちゃんは、本島たちが川で遊ばなくなった四日目^に一人でその「流木の橋での遊び」をしたのかもしれない。そんな気がしていた。上手く動かない足で、腐ったそれらを踏み込み、誤って川に流された。

本島やその友人たちに、何か非があるわけではない。それも解^とっていた。

しかし本島は、川を見ると思うのだ。

彼女が自分たちを恨んでいるのではないか……と。

第貳話 水死（後書き）

十年ほど前、僕がまだ子供の頃に誰だか忘れてしまったのですが、たまに話す機会があったどこかのおじさんに、こんな話を聞かされたことがあります。

そのおじさんは「雨の後に川で遊んじゃいけないよ」と言いたかったのかもしれませんが、僕にはそれとは別の印象があつて……
言いようもないもやもやした何かを子供ながらに感じ取ったのを覚えています。

怪奇層碌

(前略)

(判読不明)

鹿苑寺金閣の從者、？式にゑちやむばと云ふ贈物ぐわあり、其れは此の世の物とわ思えぬ程に邪惡な姿形をした造形物であつたそ
うだ。？式わ異国の者と貿易したとされ、其の国名を現世の蒙古と
云ふ。從來温厚な性格であつた？式わ、其の奇妙で奇怪な實に怖ろ
しき品に身も心も吸ひ取られ、遂にわ發狂し自害したとある。曾て
蒙古でわ忌々しき儀式あり。あの世の異形 ■■■■ ■■■■
■■■（判読不明）

(中略)

怪奇層碌なる書物にわ事の顛末ぐわ詳細に綴られてゐる。此の本にわ、大層に不思議だ奇怪だと謳われし物語が当事者に依り書くわれる。この制度わ丁度金閣の出来る前くわら天皇の遊び心より生まれしもので、しかし遊びとわ裏に腹で、何くわと秘め事扱ひされてゐたが、代々榮えし皇族にとつて大きな厄となりて、其れがしが齎す災難たるやまるで魍魎の如し。タブウとなつたのだ。

鹿苑寺にて起きた災難わ、？式の手で詳細に書き遺された。

[illegible]

ンなのだ。黒とぬふくわ漆黒で短ひ枝のやふな突起ぐわあちこちく
わら出てゐて、どうにも見てゐたなくさせる雰囲気を醸すものだ
つたらしゐ。

（中略）

やはりだゐちゝやふぶではなくわつたな ■ ■ ■ （判読不明）

此処は

（中略）

第参話 屍声

俺はあるアパートの二階に住んでいる。

最近、下の階が妙に五月蠅い。俺の部屋の真下の部屋だ。ギシギシという何かが軋む音と、ウーという唸り声。もう三日間もこの調子だった。

俺はとうとう我慢出来なくなり文句を言いに真下の部屋を訪ねた。何度ノックをしても部屋の住民は出てこない。すっかり腹を立ててしまった俺は大家さんに頼んで、文句を言ってもらうことにした。その日の夜、早速大家さんが来てくれた。

しばらくして、大家さんから連絡があった。下の階の、俺の部屋の真下の部屋には、二十代の女性が住んでいたのだが、中から音がするのにも関わらず、出てくる気配はない。嫌な予感があった大家さんが部屋を開けてみると、女性は首を吊っていたそうだ。

後に警察から聞いた話では、大家さんが女性の遺体を発見したのはその女性が死んでから三日後だったそうだ。

何かが軋む音は、女性の遺体を吊るしたロープの軋む音だった。そこで俺は気付いた。

あの唸り声は一体……？

第肆話 秘密

人間の脳みそを喰う友達がいるので、食べさせてもらうことにした。

勝手が判らないからだ。

なんせ一度も喰ったことがない。

「もってきたか？」

「ああ・・・」

おれは知り合いの頭が入った袋を渡した。

友人は、なんだか嬉しそうに部屋の奥に消えて行った。

扉の向こうに。

生首を持って。

この家でしかできないらしい。

なんでこんな奴と友人なのかというと、おれは奴にとって恋のキューピット的存在だからだ。

おれの幼馴染を奴が好きでなかったら、おれとはなんの関わりもなかっただろうが、まあなんにせよ……

これで馬鹿なおれでもトップ大学に行ける。

これは多分、知っちゃいけない人間の秘密なんだろう。

こいつが友人でよかった。

第伍話 風鈴

——風鈴が、鳴っていた。

気温が三十七度を超え、街は静まり返っていた。誰も、こんな日に外に出ようなどとは思わない。

俺だってそうだ。高校の教師たちは、暑い日は図書館にでも行って受験勉強をしましょうなんて言っていたが、冗談じゃない。図書館はレヴェルの高い大学に行きたがっている神経の張り詰めた連中で溢れ返っている。とてもあんな場所に行く気にはなれない。

ただ、暑さをしのぐ術が俺にはなかった。去年壊れたエアコンはまだそのままである。俺の部屋には扇風機が一台あるだけだ。

今日は無風だった。窓を全開にしても風は入ってこず、扇風機の前に椅子を置いて座り、風を全身に浴び額に滲む汗を首から下げているタオルで拭う。

——風鈴が鳴っていた。

扇風機の風は、窓際の風鈴を鳴らす。人工的な風で鳴らされる風鈴もどうなのだろう、と思わなくもなかったが、俺はあの風鈴の音が妙に心地良く感じていた。

夜になった。熱帯夜というやつだ。夜になっても暑さは相変わらずで、風も吹かない。俺は全く寝付けず、風鈴の掛けられた窓から外に出た。今夜はペルセウス座流星群が観れる日だったはずだからだ。

一時間ほど夜空を眺めただろう。十分おきくらいの間隔で、光り輝く流れ星が様々な方向から流れる。それは優美な様だった。

俺は次第に眠くなってきていた。暑さを忘れられたからかもしれない。

窓から部屋に戻ろうとした。

丁度窓の冊子を跨ぐ時、外と内との境に当たる場所で俺はあることに気がついた。扇風機が回っている。俺は、扇風機を回したまま、電源を切り忘れて外に出たことを思い出した。

気づいたのはそのことじゃない。

扇風機の風は、俺のいる窓の場所には届かないのだ。椅子が、風の通る道を遮っているからだ。

日付が変わる前の日、つまり昨日のことだ。俺は扇風機の前に置いた椅子に座り、風を浴びていた。その時、外は無風だった。だが、風は窓のある場所には届かない。

では、どうして、あの時風鈴は鳴ったのだろう……？

——チリン。

思考する俺の背後で風鈴が小さく鳴った。あの場所に、風は届かない。

俺は冷や汗を流しながら、ゆっくり窓の方を振り返った。

窓の側で、真っ赤なワンピースを着た女の子が風鈴から下がる紐を手に持ちゆっくりと揺らしていた。

しかしその子の目線は、真っ直ぐ俺を見据えていた。蛇のような、冷たい目で。

——風鈴が鳴っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3334t/>

奇譚

2011年10月7日07時52分発行